

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	オリーブまなびの家（児童発達支援）		
○保護者評価実施期間	2025年 1月 7日 ～ 2025年 1月 31日		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○従業者評価実施期間	2024年 12月 1日 ～ 2024年 12月 28日		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○事業者向け自己評価表作成日	2025年 3月 1日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子ども・保護者のニーズに応じて、支援プログラムを作成しており、プログラム内容も工夫されている。	個別・小集団で支援を行い、一人ひとりに寄り添ったプログラムを作成している。 事前にプログラム内容について説明を行い、子どもが目的意識を持ち、意欲的に取り組めるよう促している。 机上課題だけではなく、小集団でのSSTやカード・ボードゲームを用いて、表出・表現する力を育む取り組みを行っている。	子どもの生活を豊かにし、日常生活上で般化されていくために、更にプログラム内容を検証・改善を行っていきたい。
2	職員間のコミュニケーションを大切にし、利用者に関わる情報共有や支援内容の検証・改善等について定期的に話し合い、連携した支援を実施している。	一カ月の振り返りを記録する「プロセスシート」、毎利用時に各プログラムに対して評価を記入する「引継ぎシート」を記録し、検証・改善・職員間の共有を行っている。 また会議以外の場でも職員間で意見を出し合いながら、支援内容を検討している。	今後はアルバイト・パート職員との共通理解を深めるため、記録方法や情報共有の仕方について定期的に見直しを行っていく。
3	子どもにわかりやすく構造化された環境になっており、適宜子どもの状態に応じて環境を変更している。	机上課題のスペースと集団あそびのスペースに分けて、各支援プログラムに集中できるよう環境設定している。 また子どもの発達段階に合わせて、おもちゃの配置等を工夫し、子どもが意欲的に取り組めるような環境を心がけている。	利用人数が増えるとスペースが狭くなり、環境設定の工夫が更になる。 定期的な研修を実施し、障がい特性や発達段階、支援方法について理解を深める機会を増やしていき、合理的な配慮を提供できるよう努めていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	関係機関（園・医療機関・他事業所等）との連携が取りづらい。	セルフプランの児童が多いため、相談支援事業所を介して関係機関と連携を行う機会が少ない。	今後はセルフプランのお子様も連携を図れるように、積極的に関係機関に働きかけていく。 また保護者と情報共有しながら、園・就学先等と連携を図るよう努めていく。
2	地域交流の場が少ない。	昨年度は支援センターへ行き、地域の子どもたちと交流する機会があったが、今年度は夕涼み会の実施であった。 職員数の都合もあり、地域交流の場を提供することが難しかった。	就学・就園に向けて、地域の子どもと関わる機会を提供できるよう努めていく。 また昨年度は人形劇を行い、地域の方にも楽しんで頂いたので、来年度はイベント開催できるよう検討する。
3	支援室は子どもに合わせた環境になっているが、バリアフリー化されていない場所が多い。	玄関の段差やトイレ、階段等バリアフリー化されていない箇所がある。家型の施設のため、学童期以上のお子さまにとっては適切であるが、低年齢のお子さまに合わせた環境ではない。	今後も利用されるお子さまに合わせて、足踏み台や手すり等、配慮しながら環境を調整していく。